



GREEN POLITICS

○ MORIMURA SEMINAR 2009 ○

Masashi Sugai

Sawa Tamaki

Hoshina Nakamura

Satomi Shirakawa



0. はじめに

私たち第1週目発表班は、『ラディカル・エコロジー 第7章 緑の政治』を扱う。文献では、主要な国際的環境保護団体の様々な環境活動の具体例が紹介されている。今回の発表では、それぞれの環境保護活動を理解しながら、彼らの環境活動に伴う、または残された課題や問題点を明らかにし、それらを解決する方法を提案していく。

また、文献の結論で言われている「全地球的視点に立って考える」とは一体何なのか。この疑問にも触れながら、エコロジーの本質について議論していく。

1. グループ・オブ・テンから大衆運動誕生までの流れ

■ グループ・オブ・テン

シエラ・クラブ・全米オーデュボン協会・全米野生生物連盟 etc . . .

〈当初〉中産階級のアメリカ人の利益のために保全する努力 人間中心的・功利主義的

〈活動戦略〉 金持ちの会員たちの支持を保ち続けるよう計画される

- ・ 企業からの寄付・企業の重役を含む組織構成
- ・ 企業の資金協力

エゴセントリック (egocentric) なエコ活動

= " 中産階級のアメリカ人のための利益のために保存しようとする努力" (p. 213 |. 17)

= " その倫理は人間中心的であり . . . " (p. 213 |. 17)

⇒ 政府・産業・環境主義が与える保障への不信感・ビッグテンへの幻想放棄

EX) 企業の汚染、野生地の絶滅の恐れ

■ 大衆運動の誕生

草の根の活動家 . . . 自分たちの身近な地域のことに取り組む

理念・目的 . . . 人間の健康の問題に集中 (=人間中心的・社会主義的立場を示す)

マイノリティの活動家 . . . 社会的少数者

- ・ 有毒廃棄物焼却炉の建設予定地をめぐるデモ行進

1988年 東ロサンゼルス・デモ行進 “人民は焼却炉をとめるぞ”

アウロラ・カスティッロ&ルフィル・ロイバル・アラード

⇒ 有毒廃棄物焼却炉の阻止に成功

⇒ **マイノリティの環境と健康問題**

* コーラ・タッカー . . . グループ・オブ・テンとマイノリティグループが一緒に取り組む必要性を主張

* カール・アンソニー . . . 下層社会を無視し、経済成長を環境の健全と調和させることは出来ない

人種・階級の偏ったグループの編成

⇒ 最も多く抱えられているのは人種的・民族的マイノリティなとこが高い

⇒ マイノリティの新たな積極活動があるのにも関わらず緑の運動の担い手の大部分は白

2. 色々な国での緑の政治

■ 緑の政治綱領をもった政党の出現

統一タスマニアグループ（オーストラリア）
ディー・グリューネン（西ドイツ）
Etc….

地方グループや、地域コミュニティーなど市民の大衆運動から発足。
緑の市民（草の根の活動家）が政治の介入へ。

■ ^{グリーンズ} 緑の党内部の対立

政党政治・・・既存のシステムの枠組み内での政治の転換を試みる。
運動政治・・・運動を通して政治の転換を試みる。

→ 政党政治と運動政治の間で対立

※ アメリカでは、政党政治ではなく運動政治。そこでは、生態系中心の倫理観と人間中心の倫理観の間で対立がある（4、5、6章参照）。

■ 第二世界でのグリーンズ

第二世界でも緑の運動が形作られつつある。
国家主導の膨張的な工業生産や不適切な自然の管理に対して運動を起こした。

図1 緑の党の政治綱領

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・ 四つの基本項目（1）エコロジー（2）草の根民主主義（3）社会正義（4）非暴力・ 六つの原理（5）分権化（6）コミュニティーに基礎を置く経済（7）ポスト家父長制的原理 |
|--|

3. 直接活動のエコロジストたち

直接行動とは・・・

制度として定められた手続きや社会規範に従わずに、直接自分の意思を表明・実現しようとする行動

■地球を第一に！（Earth First!）

1979年に環境主義者デイヴ・フォアマンにより設立

- ・非暴力的で戦略的なエコタージュ（エコ+破壊活動）
→人間やその他の生物にではなく、**生命のない機械や道具**に向けられる
例）丸太搬出道路の封鎖、立木伐採に対する座り込み・・・etc
- ・ディープ・エコロジーを自然の哲学として、マルサス主義を信奉する側面がある
→ソーシャル・エコロジーとの連帯を宣言

■グリーンピース（Green Peace）

1971年にオランダで設立されたNGO団体（最大の国際環境保護組織）

- ・直接行動および直接的対決を変革の方法として用いる。
→マスメディアによる地球全体へ向けた証言
→直接的対決の成り行きを記録・公開することで国際的に認知され、世界的関心を高めることができた
- ・アザラシ狩猟への反対運動
→国際的な毛皮の商業取引を大幅に減少させた
→しかし、狩猟者から生計手段を奪っているという批判が生じた
※その場所で生命活動を行っている人々に対する視点が欠けている

積極的側面

争点に対する広範な社会的注目を得られ、人々の意識に訴えることができるため、法改正や新法案など解決策を導きやすい

消極的側面

- ・集団をコントロールすることが難しく暴力沙汰になりやすいため、世論の評価が下げ、反感を高めやすい

- ・ 迷惑行為や、間接的な暴力になっていないか

4、問題点の整理

- これら三つの段落から導き出される最大の問題

⇒ さまざまなグループに所属する人で構成されるグループが存在してこなかった



それぞれのグループで一つに特化した情報しか得られない

例 1：白人の多数派と少数派エスニックグループ

グループ・オブ・テン

⇒ マイノリティ出身の理事・部長がない、スタッフでも 1% 以下

* マイノリティの人たちをもっと巻き込んでいくべき

* 関わる全ての人を含むようにグループが形成されるべき

例 2：野生保護派と人間中心派

ディープ・エコロジーとソーシャル・エコロジー

⇒ それぞれが、ある側面からしか物事を見ていないため必ず問題が発生

⇒ お互いに他のグループが取り組んでいる問題を支援できないのか

そこから、

- ◎ 関係するエスニックグループの参加とグループの統一を図ることが必要
- ◎ ローカルな視点ではなく、グローバルな視点を手に入れることが重要

ということがいえる

5. おわりに

ここまで述べてきたように、国の違いや環境の違い、政党主義と運動主義、マジョリティとマイノリティなどの様々な立場の人々が、それぞれの価値観でエコ運動を行っている。しかし、その運動が他の場所で行われている生命活動の破壊になってしまう場合がある。今行われている多くのエコ運動は、お互いの価値観を押し付け合っているだけではないだろうか。

キャロリン・マーチャントは結論で次のように述べた。

「全地球的視点に立って考え、自分の置かれた場所で行動することができるか否かは、未だ答えの出ていない問題である」

現在のエコ運動には、この全地球的視点が欠けている。彼らが全地球的視点を手に入れるには、同一の社会体制を持つ国同士や主流・多数派のみでグループを構成するのではなく、利害の対立するグループやマイノリティなども含めたメンバー構成や連合が必要であると考えられる。また、各々のグループの問題を共有し、お互いの問題意識をすり合わせることもできる議論の場が必要である。理想論であるとしてもこれらが達成されなければ、マーチャントの言う「全地球的視点に立って考え、自分の置かれた場所で行動」することはできないのではないだろうか。

MEMO

A large, empty rounded rectangular box with a thin black border, intended for writing a memo. The box is vertically oriented and occupies most of the page below the title.

